

18. 発言と責任

医事万華鏡

先日、SNS上の誹謗中傷を受け、22歳の若い女性が自ら命を絶つたニュースを目にしました。これは政府を動かすまでの社会問題に大きく発展し、誹謗中傷した人物に関する情報開示について、目下、与野党で協議しているとのことです。

ただSNS上の誹謗中傷を巡る被害は以前から起きており、遡ること2007年1月、2ちゃんねる上で匿名の発言者によって自身や家族の実名、住所を晒された男性が、その利用者たちの言動の責任が2ちゃんねるの管理人にあると訴える事件が起きました。実にSNSは利便性以上に、大きな問題を孕んでいるということです。このことはユーザー一人ひとりのモラルが問われているという言葉だけでは済ませられない問題と言えるでしょう。

ところでふと今回のSNSの問題を通して、「二条河原の落書」を思い出しました。これは京都二条河原に建武元年（1334年）8月に張られた八五、七五調の落書で、主たる内容は、当時の混沌とした世相を風刺したものです。これはまた2ちゃんねるの原型とも言われています。ちなみに落書とは、時の権力者に対する批判や社会の風潮に対す

る風刺などあざけりの意を含んだ匿名の文書で、平安初期からその例を見ることが出来ます。

悲しかな、この二条河原の落書にみられるように人というのは風刺や揶揄を好む生き物らしいです。シャーデンフロイデ (Schadenfreude)

といって、他者の不幸や苦しみを見聞きした時、喜びを抱いてしまうようです。ただそうした性を認めつつ、批判するという行為がいかに楽な生き方であるかを自覚するべきではないでしょうか。

さてわが国には、古来より「言霊思想」があります。言葉には命が宿っているという考えです。つまり言葉は人を鼓舞することも、傷つけることもできるのです。まさに、ペンは剣より強しです。ペン、すなわち言葉はポジティブな意味で人を勇気づけるだけではなく、心を抉るほどの凶器にもなりうるということです。

とりわけ対面で言われた批判と違って、SNSやネット上の誹謗中傷は、見ず知らずの他人に共有され拡大し、問題は大きくなりがちです。それを知った当事者の痛みや苦しみが耐え難いものであることは想像に難くありません。今後ますますIT化が進む中で、SNSに関する法律を作る必要があるとは思いますが、まずは一人ひとりが言説には責任が伴うことを自覚した上で、発言していくことが求められるのではないのでしょうか。もちろん、SNSをしきりに批判しているマスコミも、その報道の在り方を問い質されるべきでしょう。

(JMS主幹・野村元久)

